

## (2) 思考力・判断力・表現力を高めるための授業の工夫

### ア 生活課題の解決

研究の実際(1)で述べたように、高等学校家庭科では、生活課題を解決する能力を育成することを目標としています。生活課題はただ単に体験しただけ、知識を得ただけで解決できるものではありません。体験だけで終わってしまったり、生徒が疑問に思ったことに気付く前に教師が課題を与えてしまったりすることで、生徒自身の問題として捉えられない状況が生まれ、体験が意味のある経験にならずに終わってしまうこともあります。

図2のように獲得した知識や技術を使って体験する中で、何かに気づき、考え、工夫することが大切であり、この過程を経て体験が経験となり、経験したことを自分の課題に合うように応用することで生活課題の解決に至ります。この過程を繰り返すことで、個人や家族、地域・社会の課題を解決していくこととなります。

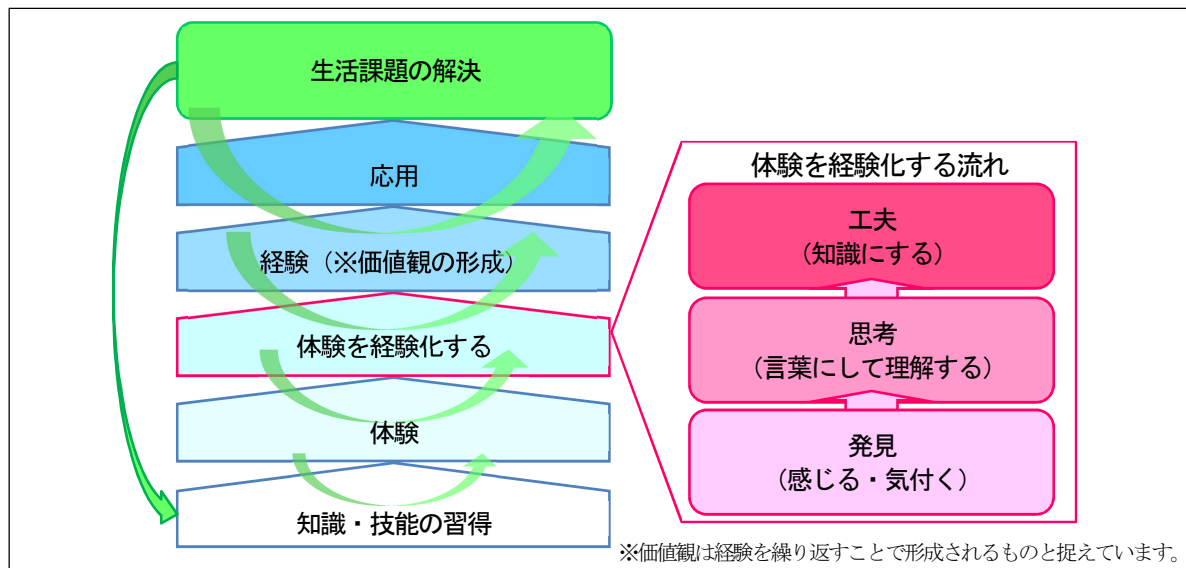


図2 生活課題解決の流れ

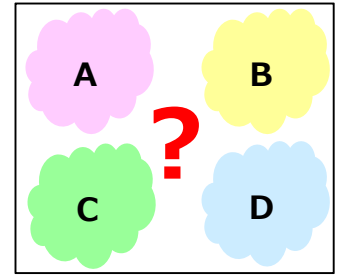
学んだことを実生活における行動に移行し、それぞれの生活課題を解決するためには、自分なりの価値観を形成する必要があります。そのために考える過程が必要になります。家庭科は、実際に体験できるという特徴がありますが、すべてのことを体験できるわけではありません。授業で体験できないことについては、これまでの体験を基に考えることとなりますが、このような状況において、自分なりの価値観を形成するためには、多様な価値観を受け入れる機会をつくる必要があります。多様な価値観を受け入れることは体験ができる、できないにかかわらず、生活課題を解決するために必要不可欠であるため、多様な価値観を受け入れることができる協働的な学習としてのアクティブ・ラーニングの視点を重視した授業を提案したいと思います。

### イ 協働学習を引き起こす「知識構成型ジグソー法」

協働的な学習については、家庭科の学習方法の表4で「参加型アクション志向学習」としていくつか取り上げました。その中で注目した学習方法がジグソー法です。ジグソー法は、もともと1970年代にアロンソンによって提唱された学習法です。人種差別や衝突が絶えない学校現場を協働的な場に変えるために考え出されたもので、子どもたちの相互信頼関係を築くことを目的としています。大学発教育支援コンソーシアム推進機構(CoREF)が採用している「知識構成型ジグソー法」は、アロンソンが提唱したジグソー法を、建設的相互作用能力を引き出す仕組みとして活用し、コミュニケーション力の養成だけでなく、自分の発想と他者の言ったことを組み合わせ、新しい知識を身に付けることができるという、一人一人の理解深化に特化したものです。「知識構成型ジグソー法」の一連の活動は次頁図3の通りです。

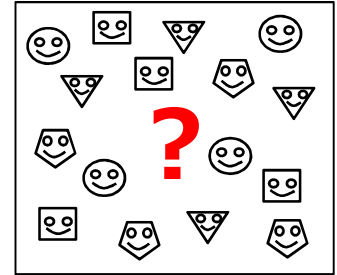
■「問い（課題）」を設定する

既知っていることや、3つか4つの知識を部品として組み合わせることで解けるものになるように「問い」を設定し、その「問い」を解くのに必要な資料を、知識のパートごとに準備します。



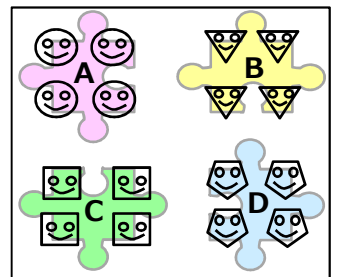
■一人で「問い」に対する答えを考える

「問い」を受け取ったら、始めに一人で今思いつく答えを書きます。



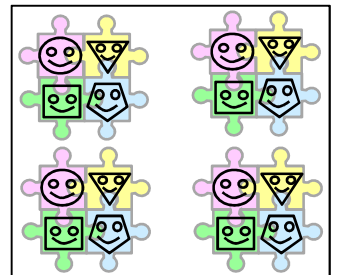
■エキスパート活動をする

同じ資料を読み合うグループを作り、その資料に書かれた内容や意味を話し合い、グループで理解を深めます。この活動をエキスパート活動と呼びます。担当する資料にちょっと詳しくなります。



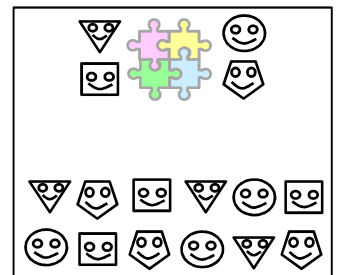
■ジグソー活動をする

次に、違う資料を読んだ人が一人ずついる新しいグループになり、エキスパート活動で理解してきた内容を説明し合います。この活動が、自分の理解状況を内省したり、新たな疑問をもったりする活動につながります。同時に他のメンバーからの説明を聞き、自分が担当した資料との関連を考える中で、理解を深めていきます。理解が深まったところで、それぞれのパートの知識を組み合わせ、問いへの答えを作ります。



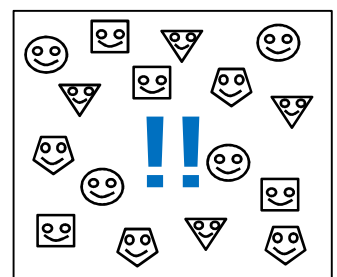
■クロストークをする

答えが出たら、その根拠も合わせてクラスで発表します。他者の意見に耳を傾けて、自分たちも全体への発表という形で表現をし直します。



■再度、一人で「問い」に対する答えを考える

始めに立てられた「問い」に再び向き合い、最後は一人で「問い」に対する答えを記述してみます。



大学発教育支援コンソーシアム推進機構(CoREF)ホームページを参照し作成

図3 「知識構成型ジグソー法」の流れ

大学発教育支援コンソーシアム推進機構は、「知識構成型ジグソー法」におけるそれぞれの活動を次のように意味付けています。

- ◆一人で「問い」に対する答えを考える。  
自分の考えていることを言葉にすることで、自分が分かっていることがどの程度かを確認する。
- ◆エキスパート活動をする  
一人一人に「人に伝えたいことがある」状態をつくることで、コミュニケーション能力の基礎につなげる。
- ◆ジグソー活動をする  
考えていることを言葉にするという体験を通して、自分の理解状況を振り返ることができ、新たな課題をもつ活動につながる。
- ◆クロストーク  
互いの答えと根拠を比較検討し、その違いを通して、一人一人が納得する過程が生まれる。
- ◆再度、一人で「問い」に対する答えを考える  
一人一人が前より納得のいく分かり方をするすることで、分かったことを使える範囲が広がる。

大学発教育支援コンソーシアム推進機構(COREF)  
協調学習 授業デザインハンドブックー知識構成型ジグソー法を用いた授業づくりーを参照しまとめたもの

「知識構成型ジグソー法」によって得られる新たな気付きや視点の変化は、より主体的に思考・判断することを促し、状況に応じたより良い意思決定や問題解決をする力の育成に非常に役立つものと考えます。

また、今回提案する授業は、「人の一生と家族・家庭及び福祉」領域のまとめとなる「共生社会」の単元になります。「共生社会」について考える時は、家族や子供、高齢者、障害者、地域・社会など様々な分野に関する課題の比較や総合的な思考が必要となるとともに、整理する情報も大量になります。そこで、それぞれの情報を持ち寄り、合意を形成していく中で総合的な思考に導くことができる「知識構成型ジグソー法」を取り入れた授業を計画することにしました。